様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年 ５月１０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５３０６９５
研究課題名（和文） リテラシーの育成を目指す評価規準と評価方法の開発

研究課題名（英文） Development of assessment criteria and assessment methods that are useful for development literacies

研究代表者
田中 耕治（TANAKA KOJI）
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：１０１３５４９４

研究成果の概要（和文）：本研究は、子どもたちが身につけるべきリテラシーの内実を明らかにし、それを育成するための評価規準と評価方法を開発することを目的として次の活動をおこなった。 (1)中国、米国、韓国をはじめとする諸外国における教育評価の理論と実践を明らかにした。 (2)日本において、教育評価に関して先進的な取り組みをしている学校の成果と課題を調査した。 (3)協力校との連携のもとで、具体的な評価規準と評価方法を開発した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the substance of literacies which children should acquire and to design assessment criteria and assessment methods that help to develop literacies. The followings are major results of this study: 1. We made clear the theories and practices of assessment in foreign countries, especially in China, the United States and Korea. 2. We surveyed the efforts on educational assessment in Japan in order to know the results and limitations. 3. We carried out collaborative action researches with some schools for the purpose of developing assessment methods and improving teaching practices in these schools.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総 計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：リテラシー、教育評価、目標に準拠した評価、学力調査、パフォーマンス評価

１．研究開始当初の背景

OECD（経済開発協力機構）による PISA（生徒の学習到達度調査）や IEA（国際教育到達度評価学会）による TIMSS（国際数学・理科教育動向調査）などの国際的な学力調査の結果が衆目を集める中で、学校教育における重要な課題としてリテラシーの育成が認識されるようになった。リテラシーの育成が強調される背景には、学校教育にとどまらず生涯にわたって必要とされる力に注目した

時、リアルな文脈において知識や技能を活用・応用し創造する力が重要であるとの認識が高まったことがあると言えよう。

日本においては特に、PISA で調査対象とされた「読解力（リーディング・リテラシー）」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」に注目が集まっている。しかしながら先行研究は、初等・中等教育段階において子どもたちに身につけさせるべきリテラシーの内実を明らかにし、学校現場において活用できる評価規準と評価方法を開発するという課題にまでは十分に踏み込んでいない。また、そうしたリテラシーを身につけさせるために求められるカリキュラム編成や授業実践に関する研究も、端緒についたばかりである。

研究代表者はこれまで、教育評価に関して国内外の状況を幅広く視野に入れつつ理論的・歴史的・実践的に研究を継続してきた。この研究蓄積は、上に記したような背景を踏まえて発展させ、国内外の研究成果に学びつつ理論的な研究を深めるとともに、教育現場のニーズに寄り添いながら研究開発を行う必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、初等・中等教育段階において子どもたちに身につけさせるべきリテラシーの内実を明らかにするとともに、それを育成するための評価規準と評価方法を開発し、実践に役立てていくことである。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、教育評価に関する理論的・歴史的・実践的な研究蓄積を基礎としつつ、国内外の理論や実践について幅広い調査を行うとともに、そこで得られた知見を活用しながら日本の学校でのアクション・リサーチを通して研究開発をおこなった。

具体的には、以下の三点を柱に据えた。

(1) 諸外国の初等・中等教育段階において保障されているリテラシーの内実と、その評価規準・評価方法を明らかにする。とくに、中国、米国、韓国における理論と実践に着目する。

(2) 日本においてリテラシーの育成をめざした実践・研究に取り組んでいる先進的な学校の調査を行い、そこでの成果と課題を明らかにする。

(3) 協力校との連携のもとでアクション・リサーチを行い、具体的な評価規準・評価方法を開発する。また、それらを実際の授業で活用することによって、その有効性を検証し、必要な改善を図るとともに、効果的な指導とカリキュラムの実現に役立てる。

４．研究成果

「研究の方法」欄に記した三つの柱について、以下のような成果を得た。

(1)諸外国におけるリテラシーの内実とその評価規準・評価方法に関する調査：

①中国の中央教育科学研究所との連携により、日本と中国の研究者による合同会議を行い、算数・数学の教科書を比較検討するとともに、両国の教育課程改革について議論した。中国では、2001 年から課程標準が導入されており、対応する評価の改革が進められていた。そのような政策の動向を把握するとともに、それが教育現場にどのように反映しているのかを検討するために、中国の研究者とともに日本と中国の小学校を訪問し、授業見学・検討会をおこなった。

また、日本と中国の研究者によるシンポジウム「日中教育課程改革の動向」を開催し、日中における目標設定と評価規準の類似点と相違点、授業場面での指導と学習のあり方について、比較検討をおこなった。

②教育評価改革を推進している韓国の白淳根先生を招き、リテラシーの規定や評価規準・評価方法について比較検討をおこなった。また、日韓の教育評価改革についてのシンポジウム「日韓の教育改革の行方」を開催した。そこでは、韓国が国家的な課題として人材育成に取り組む新しい動きについて、具体的なプロジェクトの紹介をもとに報告がなされた。

③日本・中国・韓国の研究者によるシンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」を開催し、教育評価改革の動向を比較検討した。各国の改革の特徴や直面している課題から、求められている学力の構造や教授・学習の枠組み、評価のあり方において、差異とともに共通した方向性を見出すことができた。

④米国におけるリテラシー育成に関する理論と実践について、「真正の評価論」の系譜を改めて整理するなかで、これまで行ってきたウィギンズ（G.Wiggins）やマクタイ（J.McTighe）の提唱する、評価を軸にしたカリキュラム編成論（「逆向き設計」論）に関する文献調査の成果を再度整理し、米国の教育評価研究の動向の中での位置づけを検討

した。さらに、米国におけるリテラシー育成に関する理論と実践の成果と課題を明らかにするため、評価を軸にカリキュラム編成論を提案するウィギンズとマクタイ(Wiggins, G.& McTighe, J.）の研究成果を、リテラシー育成という視点から分析した。

⑤米国におけるリテラシー育成に関する理論と実践について、スタンダードに準拠したパフォーマンス評価を専門とするバーク（K.Burke）の著書（From Standards to Rubrics in 6 steps: Tools for Assessing Student Learning, K-8. Thousand Oaks, CA: Corwin Press、2008)の全訳を行い、最新の評価規準・評価方法について分析をおこなった。その成果を報告書にまとめ、教育現場やフィールド校等に提供した。

⑥中国、韓国、米国に加えて、ドイツ・オーストリア、イギリス、フランス、イタリア、スウェーデン、オーストラリアにおける学力調査の動向を検討した。これによって、国際的な視野から日本の現状の特徴を明らかにすることができた。

(2)先進実践事例の国内調査：

①PISA の結果を受けて日本国内で注目された「読解力」について、その内実と、どのように位置づけるべきかを検討した。その上で、横浜国立大学教育人間科学部付属横浜中学校などのように、「読解力」を中心としたリテラシー育成をめざした学校現場での先進的な取り組みについて、評価規準・評価方法を一つの軸として資料収集と分析をおこなった。また、現地調査をおこなった。

②学習指導要領改訂において提起された「たしかな学力」観を読み解くとともに、PISA に触発されて衆目が集まった「リテラシー」概念についての検討をおこなった。そしてこれらに関する国内の議論や新しい取り組みを検討した。とくに、新学習指導要録で強調された「読解力」や「活用する力」について、様々な論者がどのような主張をしているのかを整理し動向をつかむとともに、過去の議論とのつながりや、現在の議論の新しさ、そして現在の課題を明らかにした。

③「活用する力」の強調が、教育現場でどのように受け止められているのかを調査し、それを育成するために先進的な授業実践を行っている学校をとりあげて、評価規準・評価方法を軸に分析をおこなった。

(3)評価規準・評価方法の開発と検証：

①京都市立高倉小学校において、読解力を中心としたリテラシー育成のために行われてきた取り組みについて、資料を収集し、分析した。とりわけグループ学習のあり方に注目し、グループ学習での話し合いの質や特徴の分析をおこなった。また、大学院生が現場教師とともに、リテラシーの育成を目指して、教材研究から授業検討、省察と改善のプロセスを協働する授業研究をおこない、教師の実践を理論的に位置づけると同時に、教育評価や学力に関する理論を実践に照らして検証した。

②寝屋川市立田井小学校において、読解力を中心としたリテラシー育成を目指して授業研究をおこなった。とくに、国語の「ごんぎつね」の単元を取り上げ、日本の民間教育研究諸団体の研究蓄積の分析・検討をおこない、これを土台に、実際の授業づくりに関する共同研究をおこない、そこでの評価規準と評価方法の特徴を明らかにした。

③評価規準の妥当性を検討・吟味する際に必要となる、子どもの学習成果物（授業で子どもが作りあげた作品やノート、ワークシートなど）を、多くの協力校において継続的に蓄積・分析した。それをもとに、様々なリテラシーについて学年を超えた発達をとらえることができる評価規準（長期的ルーブリック）の開発を進めた。

④類似した課題を異学年に提供することによって、同じ種類の能力について学年を超えた発達をとらえることができる評価規準を作成する作業に取り組んだ。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３３件）

① 田中耕治、学力調査における質と平等の問題――「真正の評価」論から見えてくるもの――、新世界教育、査読有、第 57 巻、2009、2－8
② Koji TANAKA、Academic Achievement Surveys and Educational Assessment, Global and Comparative Perspectives in Academic Competence,Evaluation and Quality Assurance, 査読有, No.1, 2008, 219－225
③ 田中耕治、「学習評価」の新しい考え方、教育展望（臨時増刊）、査読無、2009、第 55 巻第 2 号、32－37
④ 田中耕治、「信じて疑う」読解力の育成――PISA 調査が問う国語教育のあり方―

一、国語教育、査読無、第 708 巻、2009、23－25

⑤ Kanae NISHIOKA 、Issues Surrounding Academic Achievement in Japan: Examining the 2008 revisions of the National Courses of Study, Educational Studies in Japan, 査読有, No.3, 2008, 5－16

⑥ 田中耕治、学力調査と教育評価研究、教育学研究、査読有、第 75 巻第 2 号、2008、2－12

⑦ 田中耕治、「目標に準拠した評価」をめぐる現状と課題――内申書問題が提起するもの、教育目標・評価学会紀要、査読有、第 18 号、2008、1－7

⑧ 西岡加名恵、「各教科の学習の記録」について、指導と評価、査読無、第 54 巻 4 月号、2008、9-13

⑨ 田中耕治、日本的学力問題、北京市教育委員会『教育科学研究』、査読有、第 7 期、2007、54－57

⑩ 西岡加名恵、「逆向き設計」論にもとづくカリキュラム編成――中学校社会科における開発事例――、教育目標・評価学会紀要、査読有、第 17 巻、2007、17－24

〔学会発表〕（計 7 件）

① Koji TANAKA、Research on Academic Achievement surveys and Educational Assessment、The 10th International Conference on Education Research、2009 年 10 月 29 日、Seoul National University

② 田中耕治、評価の時代を問う――学力評価の現状と課題、教育目標・評価学会、2007 年 12 月 2 日、大阪経済大学

〔図書〕（計１１件）

① 田中耕治編著（執筆者全 17 名）、時代を拓いた教師たちⅡ　実践から教育を問い直す、日本標準、2009、全 245 ページ

② 西岡加名恵・田中耕治編著（執筆者全 20 名）、学事出版、「活用する力」を育てる授業と評価　中学校――パフォーマンス課題とルーブリックの提案――、2009、全 144 ページ

③ 田中耕治、岩波書店、教育評価、2008、全 236 ページ

④ 田中耕治編著、日本標準、新しい学力テストを読み解く――PISA／TIMSS／全国学力・学習状況調査／教育課程実施状況調査の分析とその課題――、2008、全 283 ページ

⑤ 田中耕治・西岡加名恵編著（執筆者全 21 名）、教育開発研究所、「学力向上」実践レポート、2008、全 198 ページ

⑥ 西岡加名恵編著、明治図書、「逆向き設計」で確かな学力を保障する、2008、全 138 ページ

⑦ 田中耕治編著（執筆者全 15 名）、三学出版、人物で綴る戦後教育評価の歴史、2007、全 230 ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　耕治（TANAKA　KOJI）

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：１０１３５４９４

(2)研究分担者

西岡　加名恵（NISHIOKA　KANAE）

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：２０３２２２６６